東京家政学院大学紀要　第 43 号　2003 年　人文・社会科学系　抜刷
（2003 年 8 月発行）

統語変化の理論に関する一考察

萱　原　雅　弘

統語変化の理論に関する一考察

萱　原　雅　弘

０．はじめに

英語の統語変化の現象を考察する場合に重要な点は，当該の統語変化がどのようにまたなぜ生じるようになったのかを究明することである。ある統語変化がどのように生じたかという点に関しては，歴史上のデータを綿密に調査することによって，その様態を明らかにすることができる。それに対して，ある統語変化がなぜ生じるようになったのかということを説明する理論の構築にはかなりの困難を伴う。

統語変化の理論を構築する際には，現代英語をひとつの比較対照の時代と捉えると，現代英語の諸構文の文法上の説明が，どのような理論的な枠組みを用いて抽象的な一般化が可能であるかということの検討も必要である。さらに，その理論が通時的理論の構築においても適用可能であれば，その理論はそれだけ妥当性の高い理論であるということができる。

筆者はこれまで，現代英語の諸構文を取り上げ，それらの構文が歴史的観点からどのような統語変化を遂げてきたのかという点と，そのような統語変化が歴史上なぜ生じたのかということを説明する理論を提案してきた。

本論文の目的は，筆者がこれまで述べてきた統語変化を説明する理論を体系化し，統語変化の理論の全体像として俯瞰可能と考えられる理論を再構築することにある。

１．調査対象の現代英語の諸構文

筆者はこれまで，統語変化の様態を述べるために，まず，現代英語の諸構文の文法上の特徴を分析した。その特徴に基づいて，対応する歴史上の諸構文との文法上の相違を明らかにすることによって，統語変化の様態に関する説明を行ってきた。筆者がこれまで取り上げた現代英語の構文は以下である。

1. This is the kind of food which you have to cook before you eat.
   （寄生的空所を含む関係節構文）
2. Her voice was soft and silky and what I can only describe as dangerous.
   （格下げされた独立関係節構文）
3. She speaks English, but she doesn’t like to.
   （代不定詞）
4. It was this novel that he wrote last year.
   （分裂文）
5. What John bought was a computer.
   （擬似分裂文）
6. the enemy’s destruction of the city
   （文名詞句）
7. the enemy’s destroying of the city

人文学部文化情報学科

（名詞的動名詞）

8. the enemy's destroying the city
（動詞的動名詞）

9. I wonder if it is true.
(if の名詞節）

10. I don't know whether she can speak French.
(whether の名詞節）

11. What a difficult problem this is!
(what 型感嘆文）

12. How delightful their manners are!
(how 型感嘆文）

13. Tom can't remember the kind of car she bought.
（潜伏疑問文）

14. Little did I dream that such an accident would happen.
（否定倒置構文）

通時的視点から捉える統語変化の現象の説明には，歴史上のある時代に用いられている諸構文の文法上の特徴と歴史上の別の時代における対応する諸構文の文法上の特徴の「差」を明らかにする必要がある。その「差」が統語変化の様態として認識可能となる。従って現代英語の構文を取り上げる場合には，現代英語の諸構文の音声上・統語上・意味上・語用論上の特徴を厳密に分析する必要がある。またすべての構文において，それらの構文の特性を包括的に説明することが可能な理論を用いて，現代英語の諸構文が理論上有機的な繋がりを呈しているということを示すことができれば，対応する歴史上の構文との繋がりを捉える説明において，より抽象度と妥当性の高い理論の構築が可能となる。複数の時代のデータを説明する共通の基盤が必要である。筆者がこれまで分析してきた際の分析の拠り所として用いることができたのは，言語学の重要な概念である「基本から派生へ」という考え方であった。「基本から派生へ」という概念を用いることによって，現代英語の諸構文の内部構造上の特徴も明らかにすることが可能となるばかりでなく，構文間の有機的な繋がりをも明らかにすることができる。

一例を挙げれば，現代英語に見られる独立関係節構文においては，以下に示すような「基本から派生」という構文間の「差」が生じている。[1]

15. a. He gave her what he had in his pocket.
b. He gave her what she thought was a gun.
c. Her voice was soft and silky and what I can only describe as dangerous.

独立関係節構文では，what を用いた独立関係節の特徴を諸論文の記述に基づいて要約して述べると，以下のような基本形としての特徴を挙げることができる。[2]

① 独立関係節全体とその内部の wh 句が名詞句としての機能を果たす。
② what が独立関係節全体の統語上・意味上の主要部である。
③ 独立関係節全体は非人間である実体を表す。
④ what を用いた独立関係節は定型節のみをとる。
⑤ what を用いた関係節は外置することができない。
⑥ 独立関係節で用いられる what に -ever を付加することが可能である。
⑦ what を用いた独立関係節構文は compatibility condition を満たす。
⑧ 独立関係節で用いられる what には強勢は置かれない。

これらの特徴をすべて兼ね備えているものが最も基本的な独立関係節構文であり，派生的な独立関係節

構文ほどこれらの特徴のいくつかが欠如している。

(15a) は上記①から⑧の特徴をすべて持っており，独立関係節としての最も基本的な形式である。これに対して (15b) は，独立関係節 what she thought was a gun 全体は，統語上は名詞句の機能を果たしているが，what she thought was の部分は，意味上一種の修飾部であると考えられる。従って，独立関係節の基本的な特徴である②の一部の特徴や⑥と⑦の特徴も欠いた派生的な独立関係節構文である。また，(15c) は，soft や silky が形容詞で，その後に同一の統語範疇を接続する役割を果たす and があるので，統語上も意味上も独立関係節の主要部は dangerous で，what I can only describe as の部分は，統語上も意味上も dangerous を修飾する修飾部であると考えられる。この形式は，独立関係節構文の最も基本的な①の条件を満たさないばかりでなく，②，③，⑤，⑥，⑦の条件も満たしていない最も派生的な独立関係節構文である。

このように，現代英語において見られる同一の構文内でも，その構文において最も基本的と考えられる特徴をすべて有した構文と，それらの特徴のうちのいくつかを欠いた構文とが共存している。換言すれば，同一構文に分類される形式内において，その統語上・意味上の特徴を綿密に分析すると，その形式におけるより基本的なものとより派生的なものとに弁別することができるということである。これがすなわち「基本から派生へ」という考え方である。この考え方に基づけば，共時的視点においては，同一構文間の差を明確にするだけではなく，後述するように，通時的視点からは，同一構文間の派生の時間的な相違をも明らかにすることができる。従って，現代英語における構文を，「基本から派生へ」という視点で分類しておくことは，通時的視点から構文を分析する際にも重要な概念であると考えられる。また，言い換えれば，通時的視点からの分析を用いれば，現代英語の「基本から派生へ」という考え方がより明確になるという，構文分析における「相互恩恵作用」が働いているということができる。

本論文では，筆者がこれまでに分析してきた現代英語の諸構文の特性については，それぞれの論文で詳細に論じてきたので，必要に応じて詳しくは述べるが，論旨の展開に差し障りがない限り，以下においては省略する。

２．統語変化の理論

統語変化の理論を構築する場合には，統語変化がどのように生じたかという点と，なぜ生じたかという点が説明可能であるのかどうかを常に念頭に置く必要がある。この章では，筆者が従来考察してきた理論で，このふたつの点がどのように説明可能であるのかということを示す。

２．１　統語変化の様態に関する理論

まず統語変化の説明において問題になるのは，当該の構文が通時的にどのような変化のプロセスを踏むのかという点である。この点を究明するためには，歴史上のデータに生起する調査対象の構文を綿密に調べていかなければならない。従ってデータが豊富に存在すれば，ある程度，構文の派生上の歴史的プロセスについて明らかにすることができる。

統語変化の様態においては，各構文がそれぞれ独自の変化のプロセスを辿るのではなく，そのプロセスを規定する一定の統語変化の様態に関する法則と考えられ得るものがいくつか存在している。筆者が調べた構文においてその点を一般化すると，以下のような法則性を捉えることができる。

２．１．１「 基本から派生へ」

１章で，「基本から派生へ」という概念を用いることによって，現代英語の諸構文の独自の統語上・意味上等の特徴を明らかにすることが可能であるばかりでなく，同一構文間の有機的な繋がりをも明らかにすることができるということを述べた。この共時的視点からの「基本から派生へ」という考え方は，

通時的視点からの同一構文間の分析においても適用可能である。すなわち，それは同一構文間の時間的派生順序を明確にする際に適用可能であるということである。具体的に述べると，同一構文間においての歴史的派生の順序は，基本的なものほど早く，派生的なものほど遅いということである。筆者が調べた構文からこの法則が適用可能な具体例を挙げると，寄生的空所を含む関係節構文，独立関係節構文，代不定詞，非定形の名詞句，潜伏疑問文，否定倒置構文を挙げることができる。[3]

ここでその一例を見る。現代英語の what を用いた独立関係節構文は，1 章で述べたように，以下のような「基本から派生へ」という構文上の差が生じている。以下の例においては，a が最も基本的で，b, c はその順序でより派生的である。

16. a. He gave her what he had in his pocket.
    b. He gave her what she thought was a gun.
    c. Her voice was soft and silky and what I can only describe as dangerous.

これらの形式に対応する歴史上の形式は，それぞれ以下である。

17. a. Thou shalt not live to brag what we have offer'd.
    (The Two Gentlemen of Verona. IV. i. 67)
    b. In excavating for it, the workmen came on what had evidently been the very centre of Roman London.
    (Old and New London. Vol.I. p.505)
    c. I, writing thus, am still what men call young.
    (OED. 1856 Mrs. Browning Aur. Leigh I. 9.)

これらの構文の歴史上の派生過程を図示すると以下のようになる。

	15c	16c	17c	18c	19c	20c
基本形 (a)	…					
派生形 (b)				…		
派生形 (c)					…	

図 1

この表から，同一構文間において，基本的な形式ほど歴史上の生起が早く，派生的な形式ほど歴史上の生起が遅いという関係が存在しているということがわかる。

さらに，「基本から派生へ」という概念は，異なった構文間における歴史上の派生過程の説明にも適用可能である。通時的視点から捉えると，各構文間には有機的な関係が存在し，その有機的な関係を成立させている基準が「基本から派生へ」という概念である。たとえば，英語の基本的構造と考えられる SVO 語順は，歴史的に早くに確立し (英語の語順の確立は 15 世紀半ば)，他の統語形式が発達する際に，その形式が基準となってその形式の特徴を継承するという形で他の新しい形式に影響を及ぼしている。このような現象は，文名詞句，感嘆文，潜伏疑問文などの構文の歴史的生起のプロセスにおいて見ることができる。[4]

ここでは，文名詞句を例に挙げて述べる。文名詞句の基本的構造である「属格形の (代) 名詞＋派生名詞化形＋ of ＋名詞句」という形式が確立したのは，語順が確立した時期よりやや後の時代であるという歴史上の事実がある。文名詞句の構造は, 英語の形式の基本的な語順の順序と統語上同一である「属格形の (代) 名詞＝主語＋派生名詞化形＝動詞＋ of ＋名詞句＝目的語」の形式を備えている。従って，英語の基本的形式であるSVO語順の確立が文名詞句の内部構造を確立･安定させたということができる。

以上のように，「基本から派生へ」という概念は，通時統語論の枠組みにおいても，同一構文間の歴史上の派生過程ばかりでなく，異なった構文間における歴史上の派生過程をも説明することが可能な重要な統語変化の「理論」として捉えることができる。「基本から派生へ」という概念は，共時的視点から統語構造間の有機的な結び付きを把握するのを可能にすると同時に，通時的視点からは，統語形式内及び統語形式間の派生の時間的順序付けの根拠をも提示することができる。また，通時的視点からの研究が進むことによって，現代英語の統語形式内や統語形式間の基本形と派生形との弁別を可能にすることもできる。「基本から派生へ」という概念は，共時的にも通時的にも言語の根幹に関わる基本的な概念である。

２．１．２　「橋渡し」

統語変化の一連の流れを時間的な幅で眺めてみると，その変化の「橋渡し」として用いられる形式が存在する場合がある。この「橋渡し」構文は，歴史上のある時期に，基本形から派生形を生じる際に，一時的に存在するだけで，その後の当該の形式により派生的な形式として必ずしも残る訳ではない。まさに，統語変化の流れをスムーズに行うための補助的な形式と考えられるものが歴史上の短期間に存在するということである。このような「橋渡し」構文は次のような形式に見いだすことができる。ひとつの例としては，寄生的空所を含む関係節構文と類似の構文である関係節内の副詞節内と主節内の両方に resumptive pronouns が存在する関係節構文を挙げることができる。[5] この形式は，寄生的関係節構文が歴史上派生するための「橋渡し」構文であると考えられる。というのは，この形式は，関係節内に副詞節を伴う他の類似した関係節構文をモデルとして，その統語上の特徴を引き継いで，寄生的関係節構文の派生を促したと捉えることができるからであ。また代不定詞においては，to it という形式が短期間だけ存在し，代不定詞の生起する統語環境をさらに拡張させていく役割を担っている。[6] 非定形の名詞句の発達における名詞的動名詞の役割においても同様の現象を見いだすことができる。[7]（以下，下線部筆者）

18. a. And both like serpents are, who though <u>they</u> feed
On sweetest flowers, yet <u>they</u> poison breed.
(Pericles. I. i. 132–3)
b. Why will my lord do so?
For that he dares us to’t.
(Antony and Cleopatra. III. vii. 29)
c. Then <u>this breaking of his</u>
Has been but a try for his friends?
(Timon of Athens. V. i. 8–9)

この「橋渡し」形式はすべての統語変化の現象において見られる訳ではなく，また構文の複雑なものほどよく現れるという訳でもなく，明確な生起理由は明らかではないが，統語変化の一連の流れを導くための役割を果たしていると考えられる。

２．１．３　統語変化の拡張のプロセス

統語変化がどのように生起するかという点に関しては一定の法則が存在している。統語変化のプロセスを考える場合には，ふたつの視点からの考察が必要である。ひとつは内部的拡張，もうひとつは外部的拡張である。前者は，当該の構造の内部形式がどのような特徴を持った形式から発達していくかという，構造の内部自体の変化のプロセスである。後者は，当該の構造が，どのような外部的統語環境のもとで生起するようになるのかという，問題の構造と外部環境との相関関係を踏まえた変化のプロセスで

ある。しかも各プロセスは，恣意的に個々独立し一定の法則性もなく行われるのではなく，ある一定の原則に基づいて統語変化が拡張していくと考えられる。

内部的な拡張の例でいうと，独立関係節構文内で使われる動詞は call を基本として拡張し，時間の経過とともに他の動詞にも拡張していくというプロセスを見て取ることができる。[8]

19. a. Before this Disappointment, Sir ROGER was <u>what you call</u> a fine Gentleman,
(Specator. No. 2. p.8)

b. It was at this extremity—and he never resorts to the expedient until the bidders have reached <u>what they themselves at the time conceive to be</u> the highest point —
(Old and New London. Vol. I. p.524)

同様の現象は，潜伏疑問文の内部的な拡張のプロセスにおいても見ることができる。[9]

20. a. Now yf so be that the semeth to longe a
tarieng to abide til that the sonne be in the
hevedes of Aries or of Libra, than wayte
whan the sonne is in eny othir degre of the
zodiak, and considre <u>the degre of his</u>
<u>declinacioun fro the equinoxiall lyne</u>;
(A Treatise on the Astrolabe. Part II. 25. 29-34)

b. for mine own part, I know
not <u>the degree of the Worthy</u>, but I am to stand
for him.
(Love's Labour's Lost. V. ii. 506-508)

c. He shall think that thou, which knowest <u>the way</u>
<u>To plant unrightful kings</u>, wilt know again,
Being ne'er so little urg'd another way,
To pluck him headlong from the usurped throne.
(Richard the Second. V. i. 62-65)

d. I did not know <u>the extent of the injury I meditated</u>, because I did not then
know what it was to love.
(Sense and Sensibility. Vol. Ⅲ. Chapter Ⅶ. p.194)

例からわかるように，潜伏疑問文においては，間接疑問文で用いられる疑問詞や接続詞 if や whether の代わりに，疑問の意味を含意する名詞が繋ぎの語として用いられるが，その名詞は degree を基本形として拡張していく。

同様の例は，文名詞句，分裂文，擬似分裂文，感嘆文，否定倒置構文の統語的発達過程における内部拡張プロセスにおいても見ることができる。[10]

次にもうひとつの拡張プロセスである外部的拡張の例について述べる。ある構造がどのように外部的な統語環境で生起し出すかという点に関しては一定の原則が存在している。すなわち，まず当該の構文の基本形がある特定の統語環境に派生し，次第により一般的な統語環境に生起していくというものである。[11] その例を代不定詞に見る。[12] 筆者が調べたデータによれば，Chaucer の作品からは，擬似法助動詞の直後の動詞句が省略された形式の代不定詞が，また，Shakespeare の作品からは，動詞の補部の位置に生ずる代不定詞が存在している。

21. a. That to the tylyer is fordon
The hope that he hadde to φ soon.

(The Romaunt of the Rose. 4339–40)

b. What Tranio did, myself enforc'd him to φ;
(The Taming of the Shrew. V. i. 129)

c. By my soul, nor I,
And yet, to satisfy this good old man,
I would bend under any heavy weight
That he'll enjoin me to φ.
(Much Ado about Nothing. V. i. 275–278)

歴史上のデータの裏付けから，代不定詞の基本形が派生する外部的統語環境は，動詞の補部と擬似法助動詞の直後と考えられる。この仮説を支持するデータとして，19 世紀と 20 世紀の代不定詞の例が納められている Visser（1966：vol. 2）に基づいて，代不定詞が生起する統語環境の分布を筆者がまとめたものを表 1 に挙げる。

統語環境	数	割合
動詞の補部	21	56.8%
擬似法助動詞の直後	9	24.3%
主語の位置	4	10.8%
間接疑問節	1	2.7%
形容詞的用法	2	5.4%

表 1

これによれば，代不定詞が歴史上一般化してきた時期においても，代不定詞の生起する統語環境は，8 割以上が動詞の補部と擬似法助動詞の直後であるということがわかる。

さらにこの考え方の妥当性を示す現象を現代英語の代不定詞の派生分布において見ることができる。それは，現代英語において代不定詞の外部的統語環境の派生において，その文法性に全く問題を生じないのは，動詞の補部と擬似法助動詞の直後の位置である。それ以外の統語環境に代不定詞が生起する場合は，その容認可能性に差が生じている。基本形の基本的派生位置であればあるほど，歴史上，安定した文法性を保っていると言うことができる。このことを確認するために，以下に現代英語の代不定詞の生起する統語環境において容認可能性に差が生じているということを示す例を挙げる。

Ⅰ．すべて容認可能な場合

① 動詞の補部

22. a. We needed someone to *buy the present*, so Paul was persuaded to φ.
(Zwicky (1982：14))

b. She *opened the window*, though I had told her not to φ.
(Zandvoort (1975：23))

② 擬似法助動詞の直後

23. a. I don't *dance* much now, but I used to φ a lot.
(Swan (1980：328))

b. I'm surprised to see you *smoking*：You used not to φ.
(Sawada (1985：135) from 今西・浅野 (1990))

Ⅱ．容認度が条件付きの場合

③ 形容詞の補部

24. a. Bob says that he doesn't know if he will *succeed*, but I think he is certain to φ.
(天沼 (1987 : 77))
b. I meant to *destroy it* from the first, but I was afraid to φ.
(Jespersen (1949 : 340))
c. *John didn't *run away from the bear*, though Bob was wise to φ.
(天沼 (1987 : 77))
d. *Sally was slow to *react*, though Lucy was quick to φ.
(天沼 (1987 : 77))
e. John's mother did not allow him to *go with her,* though he was glad not to φ.
(Amanuma (1989 : 31) from 今西・浅野 (1990))

④ 名詞の補部

25. a. He'll never *leave home*:he hasn't got the courage to φ.
(Swan (1980 : 328))
b. He'll never *ask me to help him* − he'll find ways not to φ.
(Jespersen (1949 : 340))
c. ?He was afraid to *undertake it* because he didn't have the letter of authorization to φ.
(Zwicky (1982 : 41))
d. ?*All the students *went there*, and none of them doubted their obligation to φ.
(天沼 (1987 : 77))

Ⅲ. 容認度に差がある場合

a) 同一の統語環境においても容認度に差が存在する場合

⑤ 間接疑問節

26. a. I want to *calculate the bill*, but I don't know how to φ.
(Zwicky (1982 : 14))
b. ?/*Sally has to be told when to *leave for school* ; she can't remember when to φ on her own.
(Lobeck (1986 : 157) from 今西・浅野 (1990))
c. Sally knows when to *leave for school* ; she just doesn't know when not to φ.
(Lobeck (1986 : 164) from 今西・浅野 (1990))
d. %I'm thinking of *moving to Hawaii*, but I can't figure out whether to φ.
(Zwicky (1982 : 26))

⑥主語の位置

27. a. *You shouldn't *play with rifles*, because to φ is dangerous.
(Zwicky (1982 : 7))
b. %You shouldn't *play with rifles*, because it's dangerous to φ.
(Zwicky (1982 : 13))
c. You must *write a thank-you note*, because not to φ would be impolite.
(Zwicky (1982 : 26))
d. %I don't think your children should *play with rifles* : in particular for George to φ would be very dangerous.

(Zwicky (1982 : 30))

e. Children really should *learn to use rifles*, since {not to φ/for them not to φ} can leave them defenseless.

(Zwicky (1980 : 167) from 今 西・浅野 (1990))

b) 一般的に容認不可能だが，容認されることもある場合

⑦ 形容詞的用法

28. a. *John is the man to *fix the sink*, but Bill thinks Tom is the right person to φ.

(Lobeck (1986 : 155) from 今 西・浅野 (1990))

b. John might be the man to *fix the sink,* but Bill is most certainly the man not to φ.

(Lobeck (1986 : 164) from 今 西・浅野 (1990))

c. I would *open it* if I had the right tool to φ.

(Zwicky (1982 : 41))

d. ?I would *open it* if I had the tool to φ.

(Zwicky (1982 : 41))

e. Willie plans to *disrupt the syntax sessions*. He thinks that the best time to φ is right before lunch.

(Zwicky (1980 : 169) from 今 西・浅野 (1990))

⑧ 副詞的用法

29. a. *Ron wanted to *impress the reporter*s, so he wore a pink carnation in order to φ.

((Lobeck (1986 : 163) from 今 西・浅野 (1990))

b. Ron didn't want Nancy to *impress the reporters*, so she put on ragged blue jeans in order not to φ.

((Lobeck (1986 : 163) from 今 西・浅野 (1990))

c. How did you know it would *give that effect*? I created it to φ.

(Dingwall (1971 : 71 notes 8))

d. She probably didn't *know the truth about it* herself. She's been brought up not to φ.

(Jespersen (1949 : 341))

e. %If you want to *finish your thesis*, then you're going to write fast to φ.

(Zwicky (1982 : 13))

f. %It's not easy to *justify your attitudes*, and besides you'd have to talk fast to φ.

(Zwicky (1982 : 30))

g. *It's not easy to *justify your attitudes*, and besides to φ you 'd have to talk fast.

(Zwicky (1982 : 30))

Ⅳ. 容認不可能な場合（但し否定形の代不定詞の場合は除く）

⑨ 繋辞 be の補語の位置

30. a. *I suggested that we *play tennis* as I knew that their past time was to φ.

(Muro (1974 : 320) from 今 西・浅野 (1990))

b. *I didn't want to *go*, but what he wanted was to φ.
(Zwicky (1982 : 14))
c. I told Bob that you intended to *kill him* though I knew that your intention was not to φ.
(天沼 (1989 : 78))

「基本から派生へ」という概念を述べた際にも用いたように，共時的視点からの言語現象の一般的法則が，通時的視点からの構文の派生過程の法則性に密接に関わっているという原則に基づいて，通時的視点から代不定詞の外部的統語環境の拡張の順序のプロセスがどのようなものであったのかを推測すると，次のような順序を提案することができる。

動詞の補部・擬似法助動詞の直後
↓
形容詞・名詞の補部
↓
間接疑問節・主語の位置
↓
形容詞・副詞的用法
↓
繋辞 be の補語の位置

同種の拡張プロセス現象は，寄生的空所を含む関係節構文，格下げされた関係節構文，文名詞句，名詞的動名詞，動詞的動名詞，潜伏疑問文の統語形式においても見ることができる。[13]

このように，ある形式の統語変化の様態のプロセスは，内部的拡張と外部的拡張というふたつの発達過程を担っているということができる。内部的拡張においては，基本的なものほど歴史上の生起過程が早く，外部的拡張においては，ある狭い環境から変化が生じ，より広い環境に拡張していく。

２．１．４　まとめ

以上のことより，通時的視点から統語形式の拡張のプロセスを分析すると，次のような一般原則が存在していると考えられる。

① 統語変化の拡張には，当該の構造自体が拡張する内部的拡張と当該の構造が生起する統語環境が拡張する外部的拡張とがある。
② 統語変化の内部的拡張においては，各構文は当該言語の統語上・意味上の基本的な特性を継承して拡張する。
③ 統語変化の内部的拡張においては，基本的な特性を持っている形式ほど歴史上早く生起し，派生的な形式ほど生起する時期が遅い。
④ 統語変化の外部的拡張は，ある狭い統語環境から始まり，次第により広い統語環境に広がっていく。
⑤ ある統語変化には，新しい統語形式に至るための繋ぎの統語形式が短期間存在する場合がある。

統語変化の拡張プロセスを通時的視点から構築していくと，現代英語の当該の統語構造の容認可能性の差異が重要な役割を果たしているということがわかる。歴史上の統語変化のプロセスを解明するには，共時的視点からの考察も必要不可欠であるといえる。

２．２　統語変化の生ずる要因を説明する理論

通時言語学において統語変化の説明に用いられる説明原理として，analogy，borrowing，extension，grammaticalization，reanalysis，shift of markedness，the Transparency Principle などがある。[14] これらの概念はどれも通時統語論では，主に統語変化の様態を説明する根本的原理として重要なものである。しかし，これらの考え方は，統語変化が結果的にどの変化の部類に属するとか，どのようなプロセスを踏んで変化が生じたのかという点については説明可能であるが，なぜ統語変化が生じるようになったのかを説明するという点では不十分である。

言語はなぜ変化するかという問題を究明するのは，通時統語論研究者にとっては難しい課題である。現在使われている言語も時間の流れの中で少しずつ変化している。言語とそれを使用する人間が同時代的に存在していても，その言語の変化の理由付けをその時間の幅の中で解明しようとするのにはかなり困難を伴う。しかも，現代英語の分析という共時的視点からの考察においても解明されていない言語現象は多い。

言語というものは，本質的には人間が思考する際や人とのコミュニケーションのために用いる媒介手段である。その言語が変化する場合に一定の原理が存在するとすれば，それは言語の内在的特性と密接に結び付いていると考えるのが自然である。換言すれば，言語変化の理由は，言語を用いるのは人間のみに与えられた特性であるので，人間の持っている普遍的な認識作用と結び付いたものとして捉えることができるということである。

それでは，そのような人間の普遍的な認識作用とはどのようなものであろうか。既述したように，言語は人間自身内部での思考を巡らしたり，対人間の思考の伝達のために用いられるものであるから，その円滑な過程をできるだけ効率よく，言い換えれば言語伝達効率をできるだけ高めるような原理が働いていると考えられる。たとえば，この言語伝達効率を高めるためには，できるだけ余剰的な言語表現を避る必要がある。ひとつの形式にひとつの意味という関係が存在していれば，言語伝達効率は高まる。また一方では，思考と言語の間には常に均等な対応関係があるのではなく，思考と言語の間には何らかの差が生じている。その差はおそらく思考の方が言語より優っており，その思考を表現する言語がその思考を表現する形式を満たす形で新しい形式が形成されていくと考えられる。さらにこういったふたつの流れを何らかの形で一定の言語という特性を備えた，言い換えれば，人間の認識作用の範囲内で用いることが可能な形式（対人間のコミュニケーションを成り立たせることが可能な形式）として保っておくための安全装置的な原理が必要となる。

以上の点を考慮して，筆者がこれまで統語変化の現象を綿密に分析したことから考えられる統語変化の生ずる要因を説明する原理として，「経済性の原理」，「補完の原理」，「修復の原理」の３つを挙げることができる。これらの原理は統語変化の要因を説明する原理であるが，必ずしも統語論のレベルだけではなく，意味論や語用論のレベルに基づいた統語変化の要因の説明を必要としているものである。これはこれまでの考え方からすれば至極当然の結果である。というのは，言語変化というのは，人間の知覚処理に基づいた言語の本質的な特性と結び付いているので，統語論だけで説明されるというのは考えにくい。統語論や意味論や語用論などの言語を捉える際のすべての分析レベルに基づいた理論を設定する方が，人間の認識作用に基づいた理論としての妥当性はより高いと考えられるからである。

これらの原理に関して少し詳しく述べる。

経済性の原理は，変形生成文法理論でも提唱されているように，共時的観点からも言語現象を説明する理論としてすでに取り上げられている考え方である。この考え方をここでは通時的観点からの統語変化の要因の説明にも用いたものである。この原理で説明できる言語現象は，非定形の名詞句や分裂文と擬似分裂文の統語変化に見ることができる。[15]

一例を挙げる。非定形の名詞句 には，名詞的特性を内部構造として持っている名詞的動名詞及び派生名詞を主要部とする文名詞句という名詞句と，「文」としての内部構造を持つ動詞的動名詞という名

詞句がある。現代英語においては，これらの内，名詞的動名詞はほとんど用いられていない。[16] 歴史的視点から考察すると，文名詞句は名詞的動名詞より時間的に後から派生してきた形式である。文名詞句が派生する以前は，名詞的動名詞と動詞的動名詞は，派生する統語環境において比較的相補分布的な派生状況を呈していた。しかし，歴史上のある時期に文名詞句が派生してくると，その均衡のとれた派生状況に変化が生じ，名詞的動名詞と内部構造上同じ統語的特性を持つ文名詞句が，名詞的動名詞が用いられていた外部的統語環境に「割り込む」形で生起するという現象が生じてきた。そのため名詞的動名詞の形式が，動名詞としては動詞的動名詞が存在するので，同一形式が複数存在するということで，歴史上淘汰されるという結果が生じた。これはあるひとつの意味を表す場合に，統語上の派生制限の差がなければ，複数の形式が存在するとどちらか一方が用いられなくなるという経済的に言語運用効率を高めようとしたものである。このような現象を説明する原理を経済性の原理と呼ぶ。

補完の原理とは，言語の伝達において，意味論及び語用論上の必要性から，該当する表現形式が従来まで存在していた形式で表現不可能な場合に新しい統語形式を作り出すというものである。この具体的な現象は，潜伏疑問文，分離不定詞，寄生的空所を含む関係節構文の歴史上の生起過程で見ることができる。[17]

潜伏疑問文でその例を見る。潜伏疑問文は，統語上も意味上も間接疑問文と酷似した構文である。似た構文であってそれらの分布に差がなければ，先に述べた経済性の原理でどちらかに集約されるはずである。しかし，実際の談話の中で，歴史上のある時期に，間接疑問文では補いきれない談話上の必要性が存在するようになり，潜伏疑問文の形式を新たに英語の構文上に補っていった。これは先に述べた，思考を表現する言語がその思考を表現する形式を満たす形で新しい形式を獲得していくということを表している。このような変化を説明する原理を補完の原理と呼ぶ。

修復の原理とは，通時言語学ですでに提唱されている原理である「不完全な体系を修復する原理」と中尾・児馬（1990）で指摘されている「多義性の回避の原理」をまとめたものである。これらの原理はいずれも，言語が言語としての特性を失わないように，言い換えれば，人間の知覚処理過程に基づいた考え方を基にして，そこから言語の特性が逸脱しないように軌道修正するための原理である。この具体的な現象は，分離不定詞や寄生的空所を含む関係節構文の歴史上の生起過程で見ることができる。[18]

分離不定詞は，多義性を生じる構文を修正する形式である。寄生的空所を含む関係節構文の派生理由に関しては，関係節としての基本的特性を持った形式と，関係節の副詞節のみに gap が存在する基本的特性の一部を欠いている派生的関係節構文や，関係節内の主節内や副詞節内に代名詞が存在して gap の存在しない基本的特性の一部を欠いている派生的関係節構文が，歴史上共存したために，これらの流れを修正する方向付けの必要性に迫られたからであると考えられる。その結果，関係節内に副詞類が存在して，その中と関係節の主節内に同一指示的な名詞句がふたつ痕跡として存在する寄生的空所を含む関係節構文が生じたと考えられる。これらの現象は，言語を人間の知覚処理過程において，その解釈が円滑に処理されることを可能にしている。このような変化を説明する原理を修復の原理と呼ぶ。

以上，統語変化がなぜ生じるかということを説明する理論を提唱してきた。これらの理論は独自に存在する訳ではなく，相互に有機的に結び付いて言語が変化する際に作用すると考えられる。また，これらの原理の妥当性が高いのは，人間の根幹に関わる知覚処理過程の原理に基づいている点と歴史上のデータからそれらを支持する例が存在しているという点である。

３． 結語

本論文では，これまで筆者が検討してきた英語の構文から，統語変化の理論がどのように構築されるのかという点を考察してきた。統語変化の理論としては，統語変化がどのように生じるのかという様態に関する説明と，統語変化がなぜ生じるのかという要因に関する説明が必要である。様態に関する理論

としては，英語の構造の基本的と考えられる要素が，統語変化の全体の流れの方向を司っているということを明らかにした。要因に関しては，人間の知覚作用と密接に関わる概念が変化の理由としての理論の根幹を成しているということを解明した。

このような提案の妥当性は，今後，共時的視点と通時的視点の双方からの構文の研究をより深めていくことによって，さらに高められていくと考えられる。

＜注＞

1　梶田（1982：1985）
2　Bresnan and Grimshaw (1978)，梶田(1982), Quirk, Greenbaum and Svartvik (1985), Baker (1989)
3　萱原 (1986:1989:1991:1993:1995a.b:1998:2001:2002)
4　萱原 (1995a:1998:2000:2001)
5　萱原 (1986:1989:1991)
6　萱原 (1995b)
7　萱原 (1995b:1998)
8　萱原 (1993)
9　萱原 (2001)
10　萱原 (1995a:1997:1998:2000:2002)
11　中尾・児馬 (1990)
12　萱原 (1995b)
13　萱原 (1986:1989:1991:1993:1995a:1998:2001)
14　Lightfoot (1979), Hopper and Traugott (1993), Harris and Campbell (1995), Trask(1996), Lass (1997), Fischer et al. (2000)
15　萱原 (1995a:1997:1998)
16　Declerck (1991:p.498)
17　萱原 (1986:1989:1991:1998:2001)
18　萱原 (1986:1989:1991)

調査データ

① 8 世紀
1. *Beowulf*

② 14 世紀（Geoffrey Chaucer の 作品）
2. *The Canterbury Tales*
3. *Troilus and Criseyde*
4. *The Romaunt of the Rose*
5. *Boece*
6. *A Treatise on the Astrolabe*

③ 15 世紀（Sir Thomas Malory の 作品）
7. *The Tale of King Arthur*
8. *The Tale of the Noble King Arthur that was Emperor himself through Dignity of his Hands*
9. *The Noble Tale of Sir Launcelot Du Lake*
10. *The Tale of Sir Gareth of Orkney that was called Bewhaynes*
11. *The Book of Sir Tristram De Lyones*

12. *The Tale of the Sankgreal Briefly Drawn out of French which is a Tale Chronicled for one of the Truest and one of the Holiest that is in this world*
13. *The Book of Sir Launcelot and Queen Guinevere*
14. *The Most Piteous Tale of the Morte Arthur Saunz Guerdon*

④ 15 世紀

15. *Paston Letters and Papers of the Fifteenth Century*

⑤ 16 ～ 17 世紀（William Shakespeare の 作品）

16. *The Comedy of Errors*
17. *The Taming of the Shrew*
18. *The Two Gentlemen of Verona*
19. *Love's Labour's Lost*
20. *A Midsummer Night's Dream*
21. *The Merchant of Venice*
22. *The Merry Wives of Windsor*
23. *Much Ado about Nothing*
24. *As You Like It*
25. *Twelfth Night, or What You Will*
26. *The History of Troilus and Cressida*
27. *All's Well That Ends Well*
28. *Measure for Measure*
29. *The First Part of Henry the Sixth*
30. *The Second Part of Henry the Sixth*
31. *The Third Part of Henry the Sixth*
32. *The Tragedy of Richard the Third*
33. *The Life and Death of King John*
34. *The Tragedy of King Richard the Second*
35. *The First Part of Henry the Fourth*
36. *The Life of Henry the Fifth*
37. *The Famous History of the Life of Henry the Eighth*
38. *The Tragedy of Titus Andronicus*
39. *The Tragedy of Romeo and Juliet*
40. *The Tragedy of Julius Caesar*
41. *The Tragedy of Hamlet, Prince of Denmark*
42. *The Tragedy of Othello, the Moor of Venice*
43. *The Tragedy of King Lear*
44. *The Tragedy of Macbeth*
45. *The Tragedy of Antony and Cleopatra*
46. *The Tragedy of Coriolanus*
47. *The Life of Timon of Athens*
48. *Pericles, Prince of Tyre*
49. *Cymbeline*
50. *The Winter's Tale*

51. *The Tempest*
52. *The Two Noble Kinsmen*

⑥ 18 世紀

53. *The Spectator*

⑦ 19 世紀

54. *Old and New London*
55. *The Savoy*

⑧ 19 世紀（Jane Austen の 作品）

56. *Persuasion*
57. *Pride and Prejudice*
58. *Sense and Sensibility*
59. *Emma*
60. *Northanger Abbey*

コンピューター・コーパス

Austen = Burrows, J and A. Antonia. (eds.) 1992. Electronic edition. *The complete works of Jane Austen*. Oxford : Oxford University Press.

Chaucer = Benson, L.D. (ed.) 1992. Electronic edition. *The riverside Chaucer*. Oxford : Oxford University Press.

Shakespeare = Wells, S. and G. Taylor. (eds.) 1989. Electronic edition. *William Shakespeare the complete works*. Oxford : Oxford University Press.

コンコーダンス

Chaucer = Tatlock, J.S.P. and A.G. Kennedy. 1963. *A concordance to the complete works of Geoffrey Chaucer*. Mass. : Peter Smith.

Malory = Kato, T. (ed.) 1974. *A concordance to the works of Sir Thomas Malory*. Tokyo : University of Tokyo Press.

Shakespeare = Spevack, M. 1968–1970. *A complete and systematic concordance to the works of Shakespeare*. 6 vols. Hildesheim : Georg Olms.

Shakespeare = Spevack, M. 1973. *The Harvard concordance to Shakespeare*. Hildesheim : Georg Olms.

引用作品出典

Austen, J.: 1994. *Jane Austen the complete novels*. Oxford : Oxford University Press.

Beowulf : Klaeber, FR. (ed.) 1950. *Beowulf and the fight at Finnsburg*. Mass. : D.C. Heath and Company.

Chaucer, G.: Robinson, F.N. (ed.) 1966, 1987. *The works of Geoffrey Chaucer*. Oxford : Oxford University Press.

Malory, T. : Vinaver E. (ed.) 1967. *The works of Sir Thomas Malory*. second edition. 3 vols. Oxford : Clarendon Press.

Old and New London : Thornbury, W. 1872–78. *Old and new London*. London, Paris & Melbourne : Cassel and Company.　vol. 1. rpt. 1987. Tokyo : Taishukan.

Paston Letters : Davis, N. (ed.) 1971, 1976. *Paston letters and papers of the fifteenth century*. Part Ⅰ & Ⅱ. Oxford : Clarendon Press.

Savoy : Smithers, L. 1896. *The savoy*. 9 vols. London : Leonard Smithers. rpt. 1987. Tokyo : Taishukan .

Shakespeare, W.: Evans, B.G. (ed.) 1974, 1997. *The riverside Shakespeare*. New York : Houghton Mifflin Company.

Spectator : Bond, D.F. 1965. *The spectator*. 5 vols. Oxford : Clarendon Press.

参考文献

Abbott, E.A. 1869. *A Shakespearian grammar*. London : Macmillan. rpt. 1954. Tokyo : Senjo.

Allen, C.L. 1979. *Topics in diachronic English syntax*. Michigan : University Microfilms International.

天沼実 . 1987.「代不定詞の用法」『英語教育』36.11, 76-78.

荒木一雄 . 1954.『関係詞』「英文法シリーズ」5. 東 京 : 研究社 .

荒木一雄・宇賀治正朋 . 1984.『英語史ⅢＡ』英語学大系 10. 東京 : 大修館 .

荒木一雄・安井稔 (編). 1992.『現代英文法辞典』東京 : 三省堂 .

Baker, C.L. 1989. *English syntax*. Mass. : MIT Press.

Bresan, J.W. and J. Grimshaw. 1978. "The syntax of free relatives in English." *Linguistic Inquiry* 9, 331-91.

Chomsky, N. 1970. "*Remarks on nominalization*." Jacobs and Rosenbaum 1970 : 184-221.

Chomsky, N. 1982. *Some concepts and consequences of the theory of government and binding*. Mass. : MIT Press.

Clark, R. 1990. *Thematic theory in syntax and interpretation*. London & New York : Routledge.

Clark, R. and R. Ian. 1993."A computational model of language learning and language change." *Linguistic nquiry* 24, 299-345.

Curme, G.O. 1931. *Syntax*. Boston : D.C. Heath and Company. rpt. 1959. Tokyo : Maruzen.

Declerck, R. 1991. *A comprehensive descriptive grammar of English*. 465-519. Tokyo : Kaitakusha.

Dekeyser, X. 1981. "Relativizers in Early Modern English: A dynamic quantitative study. " J. Fisiak (ed.) 1984, 61-87.

Denison, D. 1993. *English historical syntax*. London : Longman.

Dingwall, W.O. 1971. "On so-called anaphoric *to* and the theory of anaphora in general." *JEL* 5, 49-77.

Dorgeloh, H. 1997. *Inversion in Modern English : form and function*. Amsterdam/Philadelphia : John Benjamin Publishing Company.

Emonds, J.E. 1976. *A transformational approach to English syntax*. New York : Academic Press.

Engdahl, E. 1983. "Parasitic gaps." *Linguistics and Philosophy* 6, 5-34.

Fisher, O., Kemenade, Ans van, Koopman, W., and Wurff, Wim van der. 2000. *The syntax of early English*. Cambridge : Cambridge University Press.

Fisiak, J. (ed.). 1981. *Historical syntax*. The Hague : Mouton.

Frampton, E. 1990. "Parasitic gaps and the theory of wh-chains." *Linguistic Inquiry* 21, 49-77.

Franz, W. 1939. *Die Sprache Shakespeares in Vers und Prosa*. Halle : Max Niemeyer. 斎 藤静・山口秀夫・太田朗訳 . (1958, 1982).『シェイクスピアの英語』東京 : 篠崎書林 .

Fraser, B. 1970. "Some remarks on the action nominalization in English." Jacobs and Rosenbaum 1970, 83-98.

Haegeman, L. 1984. "Parasitic gaps and adverbial clauses." *Journal of Linguistics* 20, 229-232.

Harris, A.C. and L. Campbell. 1995. *Historical syntax in cross-linguistic perspective*. Cambridge : Cambridge University Press.

Hines, C.P. 1974. *A grammar of the relative construction in Shakespeare's English* . Michigan : University Microfilms International.

Hogg, R.M. 1977. *English quantifier systems*. Amsterdam : North-Holland Publishing Company.

Hopper, P.J. and E.C. Traugott. 1993. *Grammaticalization.* Cambridge : Cambridge University Press.
Huddleston, R. 1984. *Introduction to the grammar of English*. Cambridge : Cambridge University Press.
今井邦彦 (編). 1986.『チョムスキー大事典』東京：大修館 .
今井邦彦・中島平三 . 1978.『文Ⅱ』「現代の英文法」5. 東 京：研究社 .
今西典子・浅野一郎 . 1990.『照応と削除』新英文法選書 11.　東京：大修館 .
Ito, H. 1980. *The language of the spectator* : *a lexical and stylistic approach*. Tokyo : Shinozaki Shorin.
伊藤健三・廣瀬和清・萱原雅弘・佐々木一隆・松原陽介・矢野浩司 . 1999.『大学生のための現代英文法』東京：開拓社 .
Jackendoff, R. 1977. $\overline{X}$ *syntax* : *a study of phrase structure*. Mass. : MIT Press.
Jacobs, R.A. 1995. *English syntax*. 81–86. Oxford : Oxford University Press.
Jespersen, O. 1909–1949. *A Modern English grammar on historical principles*. 7 vols. Copenhagen : Ejnar Munksgaard. rpt. London : George Allen and Unwin.
Joseph, E.E. 1976. *A transformational approach to English syntax*. New York : Academic Press.
Kajita, M. 1977. "Towards a dynamic model of syntax." *Studies in English Linguistics* 5, 44–76.
梶田優．1982.「英語教育と今後の生成文法」『言語普遍性と英語の統語・意味構造に関する研究』昭和 57･58 年度科学研究費補助金一般研究 B（課題番号 57450040）研究成果報告書 . 60–94.
梶田優．1985.「文法の拡張－基本から変種へ」『英語教育』34.1, 38–40.
萱原雅弘 . 1986.「通時的観点からの parasitic gaps を含む関係節構造の考察」『東京都立航空工業高等専門学校研究紀要』第 23 号 , 61–72.
萱原雅弘 . 1989.「英語の adverbial を含む関係節構文の通時的考 察：parasitic gaps を含む関係節構文を中心に」『東京家政学院大学紀要』第 29 号 , 125–135.
萱原雅弘．1991.「寄生的空所を含む関係節構文について」『現代英語学の諸相 宇賀治正朋博士還暦記念論文集』90–99. 東京：開拓社 .
萱原雅弘 . 1993.「格下げされた独立関係節構文の通時的考察」『東京家政学院大学紀要』第 33 号 , 211–216.
萱原雅弘 . 1995a.「文名詞句に関する通時的考察」『東京家政学院大学紀要』第 35 号 , 299–307.
萱原雅弘 . 1995b.「代不定詞に関する通時的考察」『東京家政学院大学紀要』第 35 号 , 309–316.
萱原雅弘 . 1997.「分裂文及び擬似分裂文に関する通時的考察」『東京家政学院大学紀要』第 37 号 , 153–163.
萱原雅弘 . 1998.「定形及び非定形名詞句に関する通時的考察－統語変化に関する理論の考察も含めて」『東京家政学院大学紀要』第 38 号 , 95–114.
萱原雅弘 . 1999.「if と whether の派生分布に関する通時的考察」『東京家政学院大学紀要』第 39 号 , 63–78.
萱原雅弘 . 2000.「what 型感嘆文と how 型感嘆文の派生分布に関する通時的考察」『東京家政学院大学紀要』第 40 号 , 123–139.
萱原雅弘 . 2001.「潜伏疑問文に関する歴史的考察」『東京家政学院大学紀要』第 41 号 , 95–105.
萱原雅弘 . 2002.「シェイクスピアの英語における否定倒置に関する一考察」『東京家政学院大学紀要』第 42 号 , 95–104.
King, R.D. 1969. *Historical linguistics and generative grammar*. New Jersey : Prentice-Hall.
児馬修 . 1984.「文法の核と周辺－史的統語論の視点から」『言語』13.5. 102–11.
児馬修 . 1990.「英語史研究 (史的統語論) の動向の一側面」『英語教育』38.13, 74–7., 39.1, 74–7.
Kruisinga, E. 1925–32. *A handbook of Present-day English*. 4 vols. rpt. 1995. Tokyo : Honnotomosha
Lakoff, R. 1972. "Another look at drift" Stockwell and Macaulay 1972, 172–198.
Lass, R. 1997. *Historical linguistics and language change*. Cambridge : Cambridge University Press.
Lees, R.B. 1960. *The grammar of English nominalizations*. Supplement to *IJAL* 26.
Lightfoot, D.W. 1979. *Principles of diachronic syntax*. Cambridge : Cambridge University Press.
Lightfoot, D.W. 1991. *How to set parameters* : *arguments from language change*. Mass. : MIT Press.

Lytle, E.G. 1974. *A grammar of surbordinate structures in English*. Hungary : Mouton.
真鍋和瑞 . 1995.『初期英語の統語・文体論研究』東京：開文社 .
McCawley, J.D. 1981. "The syntax and semantics of English relative clauses." *Lingua* 53, 99-149.
McCawley, J.D. 1988. *The syntactic phenomena of English*. 2 vols. Chicago : The University of Chicago Press.
Mitchell, B. 1985. *Old English syntax*. 2 vols. Oxford : Clarendon Press.
Murray, J.A.H., H. Bradley, C.T. Onions and W.A. Craigie. (eds.) 1888-1933. *The Oxford English dictionary*. 13 vols. Oxford : Clarendon Press.
Mustanoja, T.F. 1960. *A Middle English syntax*. Helsinki : Societe Neophilologique.
長原幸雄 . 1990.『関係節』新英文法選書 8. 東京：大修館 .
中村捷・金子義明・菊池朗 . 1989.『生成文法の基礎』東京：研究社 .
中村捷・金子義明・菊池朗 . 2001.『生成文法の新展開』東京：研究社 .
中尾俊夫 . 1972.『英語史Ⅱ』英語学大系 9. 東京：大修館 .
中尾俊夫 . 1979.『英語発達史』東京：篠崎書林 .
中尾俊夫・児馬修 (編著). 1990.『歴史的にさぐる現代の英文法』東京：大修館 .
中右実 . 1994.『認知意味論の原理』東京：大修館 .
Norman, B. 1992-2001. *The Cambridge history of the English language*. 6 vols. Cambridge:Cambridge University Press.
小野捷 . 1980.『英語発達史』東京：篠崎書林 .
小野捷・伊藤弘之 . 1993.『近代英語の発達』英語学入門講座 6. 東京：英潮社 .
小野茂 . 1984.『英語史の諸問題』東京：南雲堂 .
小野茂・中尾俊夫 . 1980.『英語史 I』「英語学大系」8. 東 京：大修館 .
太田朗 . 1980.『否定の意味』東京：大修館 .
大塚高信 . 1978.『シェイクスピアの文法』東京：研究社 .
Otsu, Y. 1977. 'Dative questions and perceptual strategies' *Studies in English Linguistics* 5, 163-173.
Poutsma, H. 1914-29. *A grammar of Late Modern English*. 5 vols. rpt. 1994. Tokyo : Honnotomosha.
Quirk, R., S. Greenbaum, G. Leech, and J. Svartvik. 1985. *A comprehensive grammar of the English language.* London : Longman.
Rissanen, M. 1981. "The choice of relative pronouns in 17th century American English. " J. Fisiak (ed.) 1984, 437-470.
Rydén, M. 1970. *Coordination of relative clauses in sixteenth century English*. Uppsala : Almqvist & Wiksell.
齋藤俊雄 . 1993.「初期近代英語における動名詞の発達」『近代英語の諸相』東京：英潮社 .
Safir, K. 1986. "Relative clauses in a theory of binding and levels." *Linguistic Inquiry* 17. 663-689.
佐々木一隆 . 1995.「英語の派生名詞化形の内部構造と分布に関する覚え書き－歴史的な視点も取り入れて」『外国文学』第 44 号 , 11-22.
佐々木一隆 . 1997.「英語の派生名詞化形のデータ分析について：出現頻度と発生・内部構造の発達・分布の拡張の観点から」『外国文学』第 46 号 , 43-54.
Stockwell, R.P. 1981. 'On the history of the verb-second rule in English' J. Fisiak (ed.) 1981, 575-592.
Swan, M. 1980. *Practical English usage*. Oxford : Oxford University Press.
Taraldsen, T. 1979. "The theoretical interpretation of a class of marked extractions. " A. Belletti, L. Brandi, and L. Rizzi (eds.) 1981, 475-516.
Trask, R.L. 1996. *Historical linguistics*. New York : Arnold.
Traugott, E.C. 1972. *A history of English syntax : a transformational approach to the history of English sentence*

structure. New York : Holt, Rinehart and Winston.

Visser, F.T. 1966. *An historical syntax of the English language*. Vol. 2. Leiden : E.J. Brill.

Warner, A. 1982. *Complementation in Middle English and the methodology of historical syntax.* London & Canberra : Croom Helm.

Wilt, K. van der. 1984. "Two remarks on parasitic gaps in Dutch." *Linguistic Analysis* 13, 145-155.

安井稔 . 1974.『英語学の世界』東京 : 大修館 .

安井稔・秋山怜・中村捷 . 1976.『形容詞』「現代の英文法」7. 東 京 : 研究社 .

Zandvoort, R.W. 1957. *A handbook of English grammar*. London : Longman. rpt. 1960. Tokyo : Maruzen.

Zwicky, A. 1982. "Stranded *to* and phonological phrasing in English." *Linguistics* 20, 3-57.